自然災害科学 *J. JSNDS 27-2 113-114*（*2008*）

巻頭言

巨大災害の時代を生きる ―我が国の防災文化「しなやかさ」を見直す

東北大学大学院工学研究科附属災害制御研究センター
今　村　文　彦

先日，2008年洞爺湖サミットが終了しその中で様々な宣言が出されたが，世界的な連携の中で地球環境問題に取り組むことの必要性は自明である。我々の生活の中でも，雪が少ない，異常な気温が記録された，爆弾低気圧が発生した，氷河が溶けて後退している，など報告が続いており，地球温暖化の影響は肌で感じるようになっている。

また一方，今年５月には，ミャンマーでのサイクロン災害，中国四川での大地震により合計十万人以上の犠牲者を出し，その影響はその国内に留まらない。６月には，岩手・宮城内陸地震が発生し，多大な被害を出している。昨年の能登半島，中越沖地震に続いている内陸地震である。今後も同じ規模の内陸地震は続き，さらには，南海トラフでの巨大地震・津波へと至ることが指摘されている。

21世紀に入り，地球規模的な災害の数は増加しているように思える。地震活動の活発化，地球温暖化，熱帯的気圧の増加，都市域のヒートアイランド現象，などによりハザードが増加している。これに加え，森林と耕地の喪失，砂漠化の進行および河川・海岸の浸食などこれらの自然環境の変化が，人間生活場の周辺でのハザード緩衝機能を低下させている。

我々の生活においても，少子・高齢化，都市圏の過密化，中山間地など地域の過疎化など，社会構造と国土構造の変化が災害に対する脆弱性を増大させている。財政状況の悪化による防災社会基盤整備の遅れや予防防災に投資できない現状もある。また，地域コミュニティにおける共助意識の衰退と災害経験伝承の不足，個人レベルでは，自然離れや過度の電子機器依存による生活などライフスタイルの変化も災害に対して災害に弱い社会を作り出している。

以上のような現状をきちんと受け止め，将来の自然災害に対して，中長期的な対策を実行しなければならない。その内容は，従来より効率的・持続的，環境に影響の少ない内容が不可欠である。

このような現状で，自然災害に対して防災力を向上させていかなければならない中，今

までと違う工夫が必要になる。この工夫を考える際に，1つのキーワードになるのが「しなやかさ」であると思っている。一見，か弱そうに思えるが，竹のような弾力性を持っているものとご理解いただきたい。真正面で，外力に対抗するのではなく，自分自身を柔軟に対応させながら，受ける力を最小限にする考えである。実は従来の我が国の防災対策の中心であった思想である。沿岸部での防潮林，河川での霞堤・遊水池，平野での輪中堤，など様々な知恵が残されている。

この「しなやか」という言葉は，一昨年出された国土審議会計画部会国土基盤専門委員会の中間とりまとめにも記載されている。その中には,「災害に強くしなやかに国土を支える国土基盤」を謳っている。起こり得る自然災害の形態を的確に想定し高度な防御水準を効率的で迅速に確保するとともに，万一の中枢機能の途絶に備えた迂回ルート等の確保を通じたリダンダンシーの強化を図る。広域的な行政･コミュニティの連携による広域防災･危機管理体制の構築を通じて，自助・共助・公助のバランスのとれた総合的な防災・減災対策を実施する。など，重要な内容が列挙されている。ただし，理念的な部分が多く，これらを我が国で具体的に実践できる内容にしていくかが課題である。